

聖書：創世記 25：27～34

説教題：長子の権利を売る

日時：2023年12月17日（朝拝）

前回見た 23 節は聖書が語る選びの教理に関する重要なみことばでした。主はエサウとヤコブが生まれる前に母リベカに対して「兄が弟に仕える」と言われました。もし彼らの誕生後に主がこのことを示されたなら、主は生まれた彼らを見て、それから決めたと受け取られる可能性があります。その場合、人間の救いは人間の行いや人間のありように基づくと見られることとなります。しかし人間の行いに基礎づける仕方では誰一人救われないというのが聖書の主張です。なぜならすべての人は神の前に罪ある者であり、神から良しと認められることはあり得ないからです。そんな人間にもし救いがあるとすれば、それはただ神の恵みによるというのが聖書のメッセージです。そのことをはっきりさせるため、主はエサウとヤコブの誕生前にこのことを語られました。そしてそれが人間社会の基準によるものでもないことを示すために「兄が弟に仕える」と通常のパターンをひっくり返すようなことを言われたわけです。この神の選びの恵みが双子の兄弟にどのように現れて行ったかというのが今日の箇所の関心事です。これはこの後の物語全体にかかることですが、二人の違いがはっきり現れた最初の出来事として今日の出来事があったのです。

まず 27 節に「この子どもたちは成長した」と書き始められ、二人が対照的な人として成長したことが記されています。一人は巧みな狩人、野の人となり、もう一人は穏やかな人、天幕に住む人となりました。これはそれ自体でどちらかが善でどちらかが悪であるということではありません。兄のエサウはアクティブな人、行動的な人で、狩りの技術を身につけ、力強さを感じさせる人です。先に全身毛衣のようであったと言われましたが（また後に毛深いことが改めて言われますが）、そういう観点からもワイルドな人、男らしい人でした。一方の弟ヤコブはより内向的で外に出て行くよりは内にこもる人、家の近くにおいて（この後見るように）シチューを作っているような人、静かな人でした。

そんな彼らに対して父と母の好みが変わっていたことが 28 節に言われています。父イサクはどちらを好んだでしょうか。「兄が弟に仕える」という御心を彼も知らされていたでしょうから、その観点からも重んずるなら弟の方ではないかと予測するところ

ですが、事実は兄エサウを愛していました。それは彼が長男だったからなのか、あるいは彼の男らしさに惹かれたからなのかなどとも思いますが、真の理由は何と「獵の獲物を好んでいたからである」でした。こんなことでイサクは兄息子の方をより愛したのかと思わずショックを受けてしまいます。獲物をしとめて美味しい肉料理を食べさせてくれるからということでイサクは兄の方を愛していた。一方の母リベカはヤコブを愛していました。その理由については書かれていません。父が兄の方をより愛しているのを見て弟を不憫に思ったからか、あるいは家の近くで料理を作るような彼をより身近に感じたからか、あるいは生まれる前に告げられた主の御心を受け止める心からだったのか。こうしてイサクの家庭には父母によるそれぞれの子に対する偏愛があったことが記されています。これが後に問題をより大きなものとするようになります。正しくない家族内の関係が、より大きな痛みをこの家にもたらすこととなります。しかしこの創世記が描いて行くことは、それでも神の計画はこのような罪ある人間によって妨げられることはないということです。彼らは彼らの罪のため、それぞれの報いを受けることとなりますが、それを超えて「兄が弟に仕える」という言葉で示された主の御心は力強く実現・成就して行く様を私たちは見るようになります。

さて双子の兄弟エサウとヤコブの違いがはっきり現れた出来事が 29 節以降に記されます。エサウとヤコブのそれぞれに分けて注目する方が分かりやすいと思いますので、そのように見て行きたいと思います。まずは兄エサウについてです。彼はこの時、野に出かけ、疲れ切って帰って来ます。するとヤコブが煮物を料理しているのを見ました。それでエサウはヤコブに言います。「どうか、その赤いのを、そこの赤い物を食べさせてくれ。疲れきっているのだ。」 原文では「食べさせてくれ」という言葉が最初に出て来て、その次に「どうか」という一応礼儀を尽くした言葉をエサウは発しています。その後で「その赤いの」「その赤いのを」を彼は 2 回連呼しています。彼はその赤い食べ物を早く欲しくてたまらなかったのでしょうか。「赤い」という言葉には印がついていて、欄外の注を見るとヘブル語で「アドム」と記されています。それで、彼の名は「エドム」と呼ばれたと言われています。彼の子孫はこの名で呼ばれることとなります。その彼は弟から、それなら「今すぐ私に、あなたの長子の権利を売ってください」と交換条件を提示されます。それに対してエサウは何と答えたのでしょうか。彼は 32 節で「見てくれ。私は死にそうだ。長子の権利など、私にとって何になろう」と言いました。長子の権利とは、その家で最初に生まれた息子に与えられる特権のことで、聖書では 2 倍の分け前を受けると後の申命記 21 章 17 節に記されます。また財

産を特別に受け継ぐこととセットで、やがてその家のリーダーとなり、その家を守る責任も生じます。そして特にアブラハム、イサクと神の契約を受け継いで来た家では、その神の祝福を担う者となるという特権を引き継ぐことも意味します。この特権についてエサウは何と言ったでしょう。彼は「今の私にそれが何の役に立つだろうか。そんなものは今の私には意味がない。私はお腹がすいて死にそうなのだ。そのお腹を満たす食べ物を得る方が私にとっては価値が高いことだ」と彼は言いました。そこで弟は「今すぐ、私に誓ってください」と迫ります。誓うというのは厳粛なことです。先の言葉をうっかり言ってしまったと後で言い訳することができなくなります。エサウはここで考え直すことができました。もう一度よく考えて先の発言を取り消すこともできました。しかし彼は何の躊躇もなく誓ってしまいます。そうして自分の長子の権利をヤコブに売りました。ここにエサウという人の性質・性格が現れています。それは一言で言えば今が良ければ良いというものです。目に見えない将来の神の祝福など、いつ実現するかは分からないからあまり意味はない。自分にとっては今が大切である。今自分を満たしてくれるものを私は選ぶ。そういう刹那主義・快樂主義・現世主義が彼の特徴でした。

そしてそれを得たエサウはどうだったでしょう。34節に「エサウは食べたり飲んだりして、立ち去った」とあります。彼は満足しました。よく食べた〜とお腹をさすり、ゲップをしながらそこを去って行きました。これによって自分は何を失ったのか、さっぱり分かっていません。そのことで悩んだ様子はありません。靈的に無感覚の人そのものです。「こうしてエサウは長子の権利を侮った」という言葉で、このエピソードは締め括られています。

では一方のヤコブはどうでしょうか。彼は兄とは反対に長子の権利を欲しいと願いました。彼は靈的な祝福を高く考える人でした。なぜ彼はこの時、煮物を作っていたのでしょうか。ある人はこれはヤコブが仕掛けた罠だと読もうとしますが、そのようなことは示唆されていません。普通に考えれば自分が食べるためだったのでしょうか。もしこれが家族のための食事作りだったなら、これを取引に使うのはナンセンスです。成立しない話になります。ですからこれは自分のためだったと考えられます。そんな彼のところへエサウが来て、それを食べさせてくれ！と頼んで来ました。この料理をあげたら自分は食べられなくなります。少なくともその量は随分減ってしまいます。ところがヤコブはそうなっても長子の権利が欲しいと思い、すかさず交換条件を提示

しました。これは普段からこの霊的な特権のことを思い、それを心から欲しいと願っている人でなければいけないことです！そして彼はこれを確かなものとするため、エサウに「今すぐ、私に誓ってください」と迫りました。並々ならぬ熱意です。本当に彼はこれを欲しいのです。そして誓ったエサウに自分が準備した食べ物を与えました。この結果、ヤコブのお腹はすいたままの状態となります。彼のお腹はグーグー鳴りっぱなしとなります。でも彼は満足したのです。これで良いと思ったのです。ここに何という違いがあるのでしょうか。ここに霊的なものをより高く考える霊の人、神の国を求める人、真の救いを何よりも求める人の姿があります。

もちろんこのヤコブには問題点もあります。果たして兄弟が困っている時、このような取引をすることは適切でしょうか。疲れて帰って来て、食べさせてくれ！と懇願する兄に、条件など付けずに優しく分けてあげる道もあるのではないのでしょうか。相手の弱さに付け込んで自分が欲しいものを得ようとするやり方は行き過ぎていると言われて当然ではないのでしょうか。ですから霊的な祝福を優先して求める彼の姿勢は素晴らしいものですが、このやり方は正しいとは言えません。彼は人間の力によって、狡猾なやり方で、祝福をつかみ取ろうとしたのです。私たちはこのヤコブが将来、神に祝福される人となるから、今回のような方法も神によみされると考えてはなりません。むしろ神の前に正しいやり方ではなかったから、彼はこの後、その報いを受けることとなります。長い間、苦しむこととなります。そのことを通して、このように人間的に無理やり祝福をつかみ取ろうとするあり方は正しくないこと、信仰に反することを彼は教えられて行くこととなります。私たちはこうしてヤコブも罪人だったことを見るのです。彼は決して立派で正しい人ではありませんでした。ですから神の救いは人間の良い行いによるのではなく、ただ神の恵みによるのです。このような彼が神の恵みによって造り変えられ、聖められて行く姿を私たちはこれから見て行くこととなるのです。

今日の御言葉に照らして私たちはどうでしょうか。エサウとヤコブのどっちに似ているでしょうか。もしいくらかでも神の祝福、霊的な祝福を高く評価して、それを求めている自分があることを思うなら、それはただ神の恵みによることを覚えたいと思います。神は私が生まれるよりも前から、永遠の昔から、選びの恵みの中に私を置いてくださったので、私は今日こうして神を求め、神の祝福を求めて、礼拝し、御言葉に聞く者とされています。そのことを感謝して益々霊的な祝福を優先して求める歩み

を祈り願う者でありたいと思います。その際、人間的な方法で神の祝福をもぎ取ろうとすることは正しくないことも今日の箇所から心に留めさせられたいと思います。それは良いことではないこと、それについては後々神の懲らしめと訓練があることを続く記事を通して学ぶ者でありたいと思います。

しかし今日の箇所を通してより問われるのは自分は兄のエサウに似ていることはないだろうかということではないでしょうか。エサウは確かに神の選びの恵みにあずかりませんでした。しかしだから否応なく彼は救いから落とされたわけではありません。今日の箇所でエサウが自ら長子の権利はいらないと言いました。これは神がそう言わせたわけではありません。エサウは意志の自由を持っています。その彼の意志に暴力は加えられていません。彼は言わされたのではないのです。彼が自分の意志で、要らないと言ったのです。そして事は彼が願った通りになったのです（彼は神の祝福を失いました）。ここに神の選びと人間の責任の奇しい関係があります。エサウは神の救いを求めたのに、神が選ばなかったために救われなかったのではないのです。時々、神の主権をそのように考えて、人間の意志に対する横暴だと批判する人たちがいます。しかしそういうことはないのです。ここでもエサウ本人が神の祝福を軽蔑して、そんなものは要りませんと言いました。誓いまでして、要らないと確言したのです。神が差し出している祝福に、ノー・サンキューと言ったのです。そういう彼から、彼が望んだ通り神の祝福ははぎ取られたのです。

果たして私たちはどうでしょうか。私たちの生活は常に選択の連続です。自分は何を選び取って生きている者でしょうか。神から来る霊的な祝福を優先して求める者でしょうか。それともこの世の一時的な祝福を優先して求める者でしょうか。たとえば日曜日に教会へ行って礼拝するかどうかもその一つです。神の招きに従って神から来る祝福を優先して求めるのか、それともこの世における自分の用事を優先するのか。また一週間の生活においても日々聖書を開き、祈る時間を大切にするのか、それよりもテレビやインターネットを見たり、趣味を行うことを優先させるのか。そこでも私たちは自分がどんな人かを自ら表すことになります。自分はヤコブに似る者なのか、エサウに似る者なのか。霊の人なのか、この世の人なのか。いつまでも残る永遠に続くもののために生きる者なのか、それとも一時的でやがては過ぎ去るもののために生きる者なのか。ヘブル人への手紙 12 章 16 節：「また、だれも、一杯の食物と引き替えに自分の長子の権利を売ったエサウのように、淫らな者、俗悪な者にならないよう

にしなさい。」 ヨハネの手紙第一 2 章 17 節：「世と、世の欲は過ぎ去ります。しかし、神のみこころを行う者は永遠に生き続けます。」

そしてこのクリスマスの時に思うことは、まさにこの時、永遠の祝福に関わる神の恵みが私たちの前に差し出されているということです。神はアブラハム、イサク、ヤコブへと引き継がれた契約の祝福のエッセンスであるイエス・キリストをついに私たちに送って下さいました。私たちはこの恵みを心から感謝して受け止め、これを尊んで神を礼拝し、これに応答して生きるのか。それともこの世のきらびやかなクリスマスを過ごすのに忙しくて、食べたり飲んだりして、それが終わると立ち去るだけの者なのか。神は今やすべての人にイエス・キリストにある救いの恵みを差し出しています。誰でもこれを受け取って自分のものにすることができます。欲しいと思う人はこれを受け取ることができます。世の多くの人々がこの祝福を軽んじ、他のものに心に向けても私たちはこの神が与えてくださっている祝福こそを受け入れて感謝し、礼拝する者へと導かれたいと思います。神はキリストにおいて罪の赦しを与えてくださり、ご自身との生ける交わりに生かして下さり、天の御国へとつながる永遠の命に今日ここで生かして下さり、かの日には御子とともにすべてを相続する者として下さいます。この真に大事なものを軽んじたり、投げ捨てることはありませんように。この真のクリスマスプレゼントを感謝して受け取り、自らが主の恵みに生かされている者であることを表し、この救いが完全に成就する日をいよいよ前に見つめて喜び、主に従う選びの民の歩みへ導かれて行きたいと思います。